

三戸吉太郎にみる日曜学校教育

— 訓蒙『神の話』をめぐる —

Sunday School Education Seen in the Writings of Kichitaro Mito

— Research on “Talks to Children about God” —

小見のぞみ*

Abstract

Kichitaro Mito (1867-1925), one of the prominent leaders of the Japanese Sunday School movement, wrote a book entitled “Talks to Children about God” in 1897. In this writing, he described only true God who has created everything of the world. Mito eagerly recommended children to learn and follow the instruction of Sunday school of his day.

The contents and ways of his teaching clarified his theological propositions and educational theories, the way people understood children, and still affects us today as follows; we should bring up children as successors of Christian faith, education is a means for missions, discipline in the tradition of Methodism is highly evaluated on educational context. These themes which he asserted must be reexamined critically in today’s situation of Japanese Christian education, especially from the view of religious education theory and Christian nurturing.

キーワード：日曜学校運動、教育的伝道、メソジストの教育理解

はじめに

現在日本で行われているキリスト教教育、キリスト教保育の特徴や、方法を考察するとき、近代日本のプロテスタント宣教の初めに導入された、日曜学校運動の影響を無視することはできない。宣教師によるキリスト教の女子教育、幼児教育、ミッションスクールの開設とキリスト教会の誕生、発展にはいつも「日曜学校」、「安息日学校」と呼ばれる活動・運動が伴っていた。

日本における日曜学校教育の歴史は『日本のキリスト教教育の歩み』¹⁾に詳しいが、140年にわたる歩みの中で、その黄金期といえる1900年代から1930年代を創生し、担った東西の雄があった。東の田村直臣(1858～1934)、西の三戸吉太郎(1867～1925)である。

田村は、東京・築地居留地でキリスト者とされ、

牧師となり、米国留学を経て、1901年に児童本位を自覚し、その後の一生を「子ども」に集中して著作、教育、牧会を行った。「日本の花嫁事件」により、日本基督教会牧師を剥奪された期間があるが、生涯長老派の神学を堅持し、東京を拠点とし、『廿世紀日曜学校』『子供の権利』『児童中心の基督教』など児童の宗教教育に関わる多数の著作と、発達段階に即した11年制、14年制などの教案(カリキュラム)ならびに子ども向けの読み物を著している。日本日曜学校協会(以下NSSA)の創立にも深く関わり、文学委員長として活動するが、1920年を境にNSSAの表舞台からは距離を置くようになる。

一方の三戸²⁾は、広島で生まれ、関西学院の創立者であるW. R. ランバスから受洗。一生をメソジストの牧師として、関西、四国、中国地方で送り、メソジスト教会の日曜学校運動の礎を創った人物となる。田村から10年ほど遅れて出生し、約10年前に他

* Nozomi KOMI 聖和短期大学 教授

1) NCC 教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み』教文館、2007年は、日本日曜学校協会(NSSA)設立100周年の記念事業の一環として出版され、年表部分は本稿にて取り上げる三戸吉太郎の時代を検証する有効な資料となる。

2) 三戸吉太郎の人物については、拙稿「学院の人々20 三戸吉太郎」『関西学院史紀要第十八号』関西学院学院史編纂室、2012年、pp.149-157を参照のこと。

界するが、同時代に日曜学校運動を自らの使命として生きている³⁾。

三戸は、神学生、牧師としての赴任先々で、子供讚美歌を作り、カード帳を草案し、日曜学校と青年同盟（エプオース同盟）を組織して、子どもたちと青年への伝道、育成を行った。日本メソヂスト教会日曜学校局長として、NSSAの理事として、日曜学校運動推進のために奔走したのである。また、関西学院の中にハミル館を建設し、日曜学校教師養成所の開校と資料の開発を行い、関学神学部やランバス女学院において日曜学校教育に関する講義を担当するなど、神学教育の中に日曜学校教育を位置づけようと試みた人でもあった。

このように三戸は、日曜学校運動の活動家、実践家であり、田村とは異なり、生涯最後まで日曜学校教育との関わりの中で生き続けたが、50代で早世したため、著作はわずかしか残されていない。そのため研究は少ないが、日本のキリスト教教育・保育の歴史の中に、今日も色濃く残る教育伝道への熱心を植えつけ、教師養成の意識を高め、子どもへのお話の様式を確立するなど、日曜学校文化との深い関連付けを行った上で、比類ない人物であった。

そこで、本稿では、三戸吉太郎が遺した数少ない著作の中で、子どもに如何に神を伝えるかを10話にわたって展開した『訓蒙神の話』（1897年⁴⁾）を取り上げる。その内容と教育方法の分析を通して、三戸の日曜学校教育とはどのようなものであったのかを考察し、加えてわずかに残されている三戸の論考をも手がかりとして、日曜学校全盛時代の子ども理解、教育論、神学的特徴を探っていく。

I. 『訓蒙神の話』に見られるもの

1. 構成と目的

この著作は、童友著『訓蒙神の話』（以下『神の話』）として1897年12月に東京教文館より発行された。英語タイトル Talks to Children About God が示すように、「キリスト教の神」や一話ごとの題に見られる神学的命題を子どもに伝えることを企図した本である。もともと1話毎の分冊を、10話まとめ

て出版した合本（全152頁余となる）で、話毎に独立した頁数がうたれ、目次や通し頁がないため、拾い出した目次構成とそれぞれの頁数を記載しておく。

「序」	J.C.C. ニュートン	p.1～4
「日曜学校の事」	（三戸による合本への序論）	p.1～19
<神の話>	第1回 神の存在	p.1～14
	第2回 神の全知全能	p.1～18
	第3回 神の遍在	p.1～11
	第4回 神の靈性	p.1～11
	第5回 神の全知	p.1～9
	第6回 神の惟一	p.1～14
	第7回 眞の神てふ話	p.1～19
	第8回 神の無始無終	p.1～14
	第9回 神の公義	p.1～17
	第10回 神の仁愛	p.1～25

著者は「童友」とのみ記されているが、これは三戸が好んで用いたペンネームで、彼自身の立ち位置をよく表したものであると思われる。『天使之聲⁵⁾』禁酒号では「水蛇の嘶」の著者として「美登の童友^{みと どうゆう}」と振り仮名が付され、当て字で「三戸」が暗示されている。

『神の話』序（明治29年6月23日付け）においては、J.C.C. ニュートン（当時関西学院神学部長で、後に関西学院第三代院長となる）が、「我友タリ學生タリ兄弟タル三戸吉太郎君ハ性來小兒ニ對シ多趣有益ナル談話ヲナシ且之ガ著述ヲナスニ長ズ、頃日一書ヲ著シ名ケテ『訓蒙神の話』ト云フ…」として、童友が三戸吉太郎であることを明記している。

また、著者本人は、この著作の目的を記した、「日曜学校のこと」の最後に、「摩耶山の麓関西学院北寮に於て童友述」と記名している。合本の出版は神学部卒業（5月）の年の12月であるため、神学生時代から子どもたちへの日曜学校教育を施していた三戸が、書き溜めて1回ごとに作っていたリーフレットを、卒業を前にまとめた物ではなかったかと推察する。この「日曜学校のこと」は、子どもたちの友

3) 田村と三戸とは、神学的背景、性格、教育的手法などあらゆる点で真反対といえるほどの違いがあったと思われる。しかし、田村は日曜学校運動に関して三戸を高く評価し、彼への批判は著述の中に一切見受けられない。同時に、三戸もまた田村を評価し、関学での田村の講演会を設定するなど、違いを越えた理解と尊敬を持っていたと推察される。

4) 三戸吉太郎『訓蒙 神の話』教文館、1897年からの引用は、その文章がある回又はタイトルのみを本文に示す形とする。

5) 『天使之聲』（天の使かひ之聲）は、三戸が考案したカード帖で国立国会図書館に1部、青山学院資料センターに「禁酒号」が1部が現存する。

である、三戸の出版の動機と、愛情、意気を感じる序論で、子どもたちに話しかける形で以下のように始まる。「愛童諸君今日は善くお來校になりました此様に諸君が來校で下さいますと童友も嬉くてたまりません」。

その後、お饅頭を子どもたちに配るおじいさんがいるのに、「食わず嫌いの子どもたち」はその美味しさを知らずに捨ててしまうという例話が語られる。こうして三戸は、日曜学校の有意義なことを知らない子どもたちを招く一方で、当時のキリスト教会や日曜学校が、社会や大人たちに、ひいては子どもたちにどのように理解されていたかを踏まえて、日曜学校の真の意味を代弁していく。1892（明24）年11月17日の文部省小学校令第12条に基づき、省令第11号をもって、尋常小学校に於いては「孝悌、友愛、仁慈、信愛、敬礼、義勇、恭儉、実践の方法」を授けること、また、特に「尊王愛国の志気」を養うことが求められているが、これは日曜学校の教えそのものなのだというのである。三戸は、日曜学校を、主に「敬神他愛（かみをうやまいひとをあいす）の教えをする所」と定義づけ、「憲法28条日本臣民は安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限りに於いて信教の自由を有す」をひいて、尊王や愛国を聖書によって語っている日曜学校は、「大日本帝国が千代に八千代に続くように」との思いに沿った場所であり、文部省が求めるよき徳を、真に教える所だとするのである。

このように、序論において三戸は、当時の日本社会においていかに日曜学校教育の価値と意義が多岐であるかを述べ、子どもたちがこの教えに触れ、この神を知ることへと導かれるようにと、熱意を込めて語っている。そのためには、大日本帝国憲法と文部省の意にそった日曜学校であることの喧伝が必要不可欠であったことが推し量られる。そうして三戸は、日曜学校教育を推進させる為に、キリスト教理解に必要な神学的命題を各回のテーマとして掲げ、参照聖書を引用し、お話をういて、最後に讃美歌を載せるという形式をもって、子ども向け読み物『神の話』を著したのである。

2. 教授方法からみる特徴

さて、本論となる10回の「神の話」は、三戸独特の技法、手法を凝らした教授方法がとられている。I-2においてはそれらの特徴を3つの点からみていく。

①問答形式・対話的方法

まず目を引くのが、お話の中で繰り返される「○○ちゃん」「○○さん」と子どもの名前を読んでの質問と、それに対する「ソー」「ソーです」からなる、先生と生徒の問答である。「正さん此旗は誰が拵へましたか？ソー先生であり升。みさをさんあなたのお衣服は誰が拵へましたか？ソーお母さんであります。」（第1回）⁶⁾といったやり取りが著作全体に一貫して見られ、質問と答えから話が展開されている。

第9回の冒頭に「何時も先生は、みなさんと問答ばかりいたしますから、今日は九つになられる悟さんという坊ちゃんと布袋さんのお話をいたしましょう。」とあることから、三戸自身もこの問答という形が、三戸のお話の基本的様式になっていると自覚していたと推察される。元来、「問答」形式は、キリスト教教育において、古くから用いられてきたカテキズム（信仰問答、教理問答）⁷⁾を踏襲した教授法であり、日本の日曜学校教育においても、その教材の当初に『さいはひのおとづれ、わらべ手びきのとひこたへ』⁸⁾が発行されている。

ただし、三戸の場合、問答は、教理問答等で確立された「神とは何ぞや」といった神学的な命題を問いとして持ち出し、その答えを記すことで解説するという様式ではなく、子どもが直ぐに答えられる簡単な質問を投げかけて、その答えを聞きながら話（神の真理や神学的命題）をわかりやすく展開するための対話・会話型の問答であった。これは、子どもたちの名前を呼びながら、一人一人の関心、興味を引き起こすために、三戸が自分のスタイルとして確立し、多用した方法であると思われる。

たとえば「神の遍在」（第3回）という命題は、三戸によれば、次のように対話的に展開されている。「和平さんお憚りですが其処の障子を少し開け

6) 以下『神の話』からの引用は、「升」（ます）等の当て字や旧仮名づかいを、読みやすさを考慮して適宜現代文に変換して記載する。

7) カテキズムの「原型はユダヤ教の過越の祭りの中で儀式の意味を子どもが親に問い、親がこれに答える問答にあると言えよう」（今橋朗、奥田和弘監修『キリスト教教育事典』日本基督教団出版局、2010年、p.73）とあるように、親子の問い答えを含んだ会話によって教えることを基にした教授法であると言える。

8) ヘボン、奥野昌綱『さいはひのおとづれ、わらべ手びきのとひこたへ』は、1872年または1873年に日曜学校用のプロテスタント初の児童書、問答書として発行された。

て下さい。和平さん大きに有難う」から始まり、和平さんが障子を開けると予め三戸が用意して天井から吊っていた折鶴が踊りだすようにしておく。「なぜでしょうか、ソー風が入って来ますからです。」そして風が部屋いっぱいになっている事を子どもたちと確認した上で、その風を、「清さんハンカチでしっかり包んでください。みさおさんは、この綱で風を逃げないように縛り、譲さんはこの鞭で風を打ってどんな音がするか聞かせ、お愛さんは風の色がどんなか見せてください。」と子どもたちにやってみるように促す。そして、部屋中にある風は、形がないため見えないが、現に部屋いっぱいになっているのは確かであること、「アノ見えない風は何処に在りますか？ そうです、^{あなたがた}汝等の居られます所には何処でも在ります。其の様に見ることの出来ない神様も何処にでも居られます」と、偏在する神を語っていくのである。

子どもたちに丁寧に話しかけ、それぞれの名前を呼び、子どもたちとの会話、対話を楽しみながら、神への思いと興味を自然に起こしていく。全編にわたって用いられている三戸のこの方法は、単に方法論であることを超え、三戸の学習者への教育的配慮や、幼いものへの限らない敬意と愛に裏付けられた子ども理解を示し、『神の話』の教育の基調となっていると思われる。

②視聴覚教材、絵画・制作

次に、三戸独特の教育法として、視聴覚教材や絵画、制作を交えながらの話の展開が上げられる。

子どもたちの制作としては、粘土で自由に物を作らせ（第2回）、人間の作ったものと神の創られたものの違いを語る。お坊さんの顔の画を黒板に書き、次に6人の子どもに、目、鼻、耳などのパーツだけを各々画かせて合わせると、奇妙な顔が出来てしまう（第6回）。ここから、たくさんの大工がいても棟梁が一人だから、頑丈な家が建つように、天地の創り主である神は唯一であることへと展開する等の例がみられる。

また、八百万の神を信じる愚かさを、「いきもの、はへもの、かね・いしるい」と書かれた重石の下で人間が押しつぶされている絵（第7回）を見せて教示するといった図解や、「ナンデモノモノハコシラヘ

ラレタ」と黒板に書く（第1回）ことで、そこまでの話をまとめて提示する板書などの方法も取り入れられている。

さらに、男女に分かれて知恵比べをするための「物知り旗」（第1回）や、先に挙げた天井から吊るされた折りヅル（第3回）、提灯（第5回）、茶碗と箸（第8回）など、目に見える物を用いて話を展開して行く様式が随所にみられる。

三戸は大変器用な人で絵心があり⁹⁾、彼の日曜学校での活動については、「玉手箱」のように中から様々な材料が出てくる大きなスーツケースを持って旅行に出かけ、「それを自由に巧みに使って、ニコニコとものしづかに、細かいところまで行き届いた講演をするのが特長」であったと記載されている¹⁰⁾。『神の話』には、その実際を感じられる場面がいくつもあるが、そのうちで三戸の教材教育の素晴らしさを特に表していると思われる第5回の提灯を用いて教える「神の全知」を以下に要約、紹介する。

「みさをさんこれは何でありますか？（風呂敷より提燈を出して示す）ソー提燈であります誠一さんこれは何に使用物でありますか？ソー」と提燈の便利なことを話す。「皆さん此提燈の中へ何が立ててありますか？美チャン何卒仰って下さい、只今皆さんのお聞きの通り美チャンは蠟燭が立ててであると申されましたが皆さんは如何お考えなさいますか？」みんなもそう思うと聞いて、しのぶに中身を取らせる。「これは何でありますか？ソー大根であります。…なぜ間違ったのでしょうか？ソー提燈の中が見えないものですから、大間違いをなさったのです。皆さん本当に私共は、無知者ではありませんか。この一つの間で、ただ、紙一枚を隔てていると、三十四の目で見ましても知れませんが、障子や襖や壁を隔てますと、いよいよ何もわかりません。」

そこから、わたしたちは、お母さんが家で何をしているかわからないし、今赤ちゃんが生まれて大喜びの家があれば、親が無くなり子どもが泣いている家もある、晴れているところ、地震に襲われているところもある等を語り、「^{ほんと}真実に人間は齒痒様に愚知ぬ者です」とする。こうして、わずか障子紙一枚の先も見えなくなり、分からないわたしたちの小

9) 青山学院史料センターには三戸吉太郎案『天地創造図解』と題された水彩の屏風絵があり、“The Creation” Illustrated by Rev. K. Mitoと書き込まれている。

10) 山本忠興編纂『日本日曜学校史』日曜世界社、1941年、pp.41~42。

ささと、全世界のすべてのところに居られ、すべてをご存じの神の存在との圧倒的な差異を語っていくのである。

また、毎回の最後にはまとめの形で「讚美歌」が記され、子どもたちが共に歌うことで、『神の話』の学びを深めることが企図されている。先述の『天使之聲』もお話と讚美歌を含んだカード貼となっていて、子どもたちの参与を促す教材や方法の追求と実践は、三戸の生涯の課題であったことが窺われる¹¹⁾。

③子どもの生活経験に基づく例話

三戸はもちろん聖書そのもののお話をしたと思われる、1914年8月4～6日に神戸の関西学院神学館で開催された日本メソヂスト教会日曜学校局の、第1回西部少年夏期学校（日本初の夏期聖書学校とされている）の報告に、「三戸講師の英雄ヨセフ傳…あり」とある¹²⁾。しかし、『神の話』においては、引用聖書箇所を必ず用いているものの、聖書物語と言われるものはなく、替りに子どもたちの生活経験に即した例話がふんだんに用いられている。

特に、「悟さんと布袋さん」（第9回）や「順坊と磐坊」（第10回）では、神とわたしたちとの関係、神の前での人間の在り方などについて、悟さんや順坊といった子どもたちを登場させる。こうして子どもが、日常の世界で体験している失敗や恐れに共感的に気づくこと、自分の生活に引き寄せて「神」を想うことが意図されていると思われる。

ここには、五男五女の子を持った父であり、神学生時代から常に教会で子どもたちと関わってきた三戸ならではの、「子ども世界」と「子どもの見る世界」の描写がなされている。例話というジャンルからは少し外れるが、当時の社会と風景を感じられる、三戸が子どもたちに語った四季を要約して挙げておく（第2回）。

神さまが地球をお回しなさるので、みなさんのお好きな時候が参ります。

春：野辺にも山にも美しい花が咲き…みなさんはおすしや、玉子や、蒲鉾の入っているお弁当を持ってお花見においでなさって、野辺のつばみや蓮華を摘みなさいます。夏：ホテル狩

り、蟬がやかましくゲヤーゲヤーゲヤーと啼きだし、外を氷やー氷やーアイスクリームと…。秋：冷たい風がソーと吹き出しますと、紅葉が赤く、庭の菊が咲き、山ではきのこが丸い頭をのっそり。冬：その木も葉を落とし、はだかになってさみしくなってきましたと、お手や足の指が冷たくなりまして、「山はひがあたるここはさむいよさむいよ」と歌って日向で遊びたくなりますが、寒い日にアノ白い、ソー雪が降りまして、雪玉を拵えたり、ダルマを拵えたり、ウサギを拵えたり…オー冷たい！神様が地球を回されるので、おもしろいではあませんか。

3. 内容から見る特徴

『神の話』に強調されていること、繰り返し語られ、用いられている言葉に注目すると、内容的な特色として以下の四点を挙げる事が出来る。

①神の超越性、絶対性

全編にわたり、神についての話の中で特に述べられているのは、「眞の神」「万物の創造主」「全知全能の神」「唯一で眞の神」など、神の超越性、絶対性である。そこにはまた、わたしたち被造物との絶対的な違いと共に、日本における他宗教やその神々との違いも主張されている。

神の超越性、絶対性は、三戸においてはよく、創造の業を例にとりて述べられている。人間の手によるものとは全く異なり、世界中でいちばん偉い人でも創りだす事ができない「天地万物を作られた神の智慧能力ことは如何ばかりか」（第2回）といった言葉がある。また、

この世界を造られたのは、ソー眞の神様です。其の神様は誰が造ったのでしょうか。眞の神様ばかりは誰も造った者はありません。眞の神様は、木の様に生えたり、皆さんや先生のようにオヤーオヤーと言って生まれたり、人形のように造作物ではありません。ソースルト皆さん、眞の神様は初めがあります？其の通り、眞の神様は初めがありません。初めの無い眞の神様は終わりがありません。皆さんよく出来ました。初めの無い眞の神様は如何しても終わりは

11) 前出の『天使之聲』（国会図書館蔵分）の奥付には「兵庫県御影町字郡家 日曜学校教材供給所 春光社」とある。三戸は、御影教会退任後ハミル館ができるまでは、御影の自宅を教材供給所として活動、ハミル館完成後は、その中に春光社を移して日曜学校教材の開発、普及に常に取り組んでいたことが分かる。

12) 『日曜学校』第1号、日本日曜学校協会発行、1914年、「各派」の報告に記載。

ありません。(第8回)

のように万物の創造主は、また永遠性を持った方であることと結びついて語られている。

他宗教、他の神々に対する卓越性については、主に第7回「眞の神てふ話」に集中して述べられていて、興味深い。「先立て先生が汽船に乗り、神戸から讃岐の多度津へ行った朝のこと」、神学生の三戸は、毎週末に四国の多度津教会へと礼拝と日曜学校の応援に出かけていたが、ある時同船したおじいさんが日の出に手を合わせ「日輪様」を拝んでいるところと出くわす。そこで問答となり、「日輪様のおかげで生きられるので」拝むのだというおじいさんに対して、「お陰」のあるものを拝むというならあらゆるもの、風の神様、水神土神、八百万の神、つまり「万物はみな神様」になってしまう。それでは、拝むものと拝まれるものはどちらが上かとの三戸神学生の問いに、もちろん拝まれる方が上とおじいさんは答える。それなら、万物が上で、拝む人が下とすると…人間はいちばん下となる。

そのことを図解で示してから、三戸は宣言する。「私共人間は日も月も草木も鳥も毛物も世界に有る目で見へる物は万物も拝んではなりません」と。何故なら、

着物は私たちがぬくぬくして風邪をひかずに達者でいさせてくれますが、着物にお礼を言いますか？ソー着物ではなく、こしらえて着せて下さるお母さんにお礼を言います。造った者と造られた物のどちらにお礼を言いますか？造った者にお礼を言わなくては。万物は一切人間の為に神様がつくってくださったのですから、人間はあのおじいさんのように万物を拝まず、万物を造られた神様を拝まねばなりません。

と、いうのである。当時の日本社会がもち、子どもたちを取り巻いていた神観や宗教心、信仰の持ち方に対して、この回ほど明確に否といい、八百万の神々に勝る「眞の神」への敬神こそが、正しい道なのだとの信念を明示している箇所はない。加えてこの回は、多宗教の習慣の中で「キリスト教の神礼拝をささげるあり方」にまで言及し、具体的事例を挙げて詳述している。

神様は何処にでもいらっしゃって実に見えないお方なので、其の眞の神様を拝みますには、嘘の神様のように神社や仏閣を建て、しめ縄をして、お神酒や灯明をあげたり、線香、鐘や太鼓、数珠をつかったり、手を打ったりして拝みません。偶像や、絵、字を神様仏様といって拝むようなおかしなことはしません。ただ、私共が、正直な潔淨な、素直な心で拝みたいところでいつでも拝みさえすればよいです。

こうして、「嘘の神様を拝む事をおやめなさいませ」と勧めるに至るのである。

他の箇所の論調とはかなり異なった、強い調子の言葉づかいが、この第7回には見られ、日曜学校と子どもを取り巻く当時の宗教的環境に、三戸は並大抵でない力を傾けて抗していたことが推し量られる。

②死ぬべき人間存在

子ども向けの話の内容として、少なからず驚かされるのは、人間は必ず死ぬ者、無知でわからないことがあり、恐れる存在であることなど、人間の弱さや限界に関する言及である。死以外の他の概念についての説明の中でも、「魚が水から出されたら死ぬように、わたしたちは風（空気）がなくて呼吸できなければすぐに死んでしまう」といった表現（第3回）もさりげなく用いられている。

第4回では、「神の靈性」について話す中で「靈魂」の説明のために、「死んだお嬢さん」の話がなされているが、これも現代の感覚からは、奇妙とさえ感じられるやり取り、言い回しであると思われる。美しいお嬢さんがいて、目も鼻も、口も、耳もあるのに、しゃべらない、聞けない、食べもしない。「手足は少しも動きません。身体に手を触れてみましたら冷たくありまして、呼吸もなさいませず顔色は青白でありました。皆さんそのお嬢さんはどうされたのでしょうか？ソー可哀相に死んでいましたのであります。皆さんは今死んでおいでるのですか？ソー生きておいでです。」可哀相なお嬢さんの死、そしてわたしたちの死と生が、小学生と思われる聞き手を相手に、あまりにも率直に語られ、死をめぐって問答がなされているのである。

死をここまで、子どもにタブー視せずに語っている背景には、「神について」語ることは、人間存在について語ることであり、それらを真摯に語ろうと

するとき、人間の死の問題は避けては通れない主題であるという三戸の自覚があると思われる。誠実に死と向き合うという三戸の姿勢は、キリスト教の神の使信こそが、人間の死と限界に対しても福音であるのだと子どもたちに伝えるところへと、第8回において向かう。

サテ万物は始めがありますから^{どうしても}必然^{どうしても}終わりがあります。人間も始めがある者でありますからどうしても死なねばなりません。如何程にお金^{どれほど}がたくさんありましても、世界中で一番賢い人になりましても、死なねばなりません。ナント^{いやなこと}不^{いやなこと}好事^{いやなこと}ではありませんか。ソー思うと泣きたくなります。しかし、人間は他の物とちがいで、この目で見える^{からだ}肉体^{からだ}は死にますが、^{たましい}靈魂^{たましい}は^{いつまで}永遠^{いつまで}も生き通しに成れる事があります。それは神様の教えを善く守り、其の教えの通りを致しますと、神様が死なないように助けてくださいます。皆さんのお正月やお祭りやお花見の時に、嬉しいやら面白いやら何ともかとも言われぬ楽しい心が致しましょう、そのようにいつもにこにこして神様と一緒に^{いつまで}永遠^{いつまで}も天国で遊ぶことが出来るのであります。アア嬉しいことではありませんか。

ここにいたって三戸は、まず、どうしても避けられない死をなんとも「いやなこと（不^{いやなこと}好事）」として語り、死ぬべき事を思うと「泣きたくなります」と述べている。死への不安や恐怖、どうすることも出来ない哀しみというものは、子どもたちにとっても当然感じられる、人間共通の体験であり、大人であり、「先生」である三戸と子どもたちに何ら変わりなく共有されるものとして、三戸はこれ提示する。

その感情と経験の共有に立って、けれども、その本当に嫌な死であっても、肉体が死んでも靈魂が永遠に生き通せる事が、神によってあることが続けて語られる。そのような、神によって与えられる、可能性としての永遠の命は、「何ともかとも言われぬ楽しい心」や、「にこにこして神さまと一緒にいつまでも天国で遊ぶこと」として表現され、この知らせを子どもの想いに引き寄せて「嬉しい」ものとして伝えているのである。

③愛の神による救いの業

④日曜学校教育の勧め

内容的な特徴として挙げられる後の二点は、『神の話』の中ではほとんどの場合対のように表されているため、併せて取り上げておく。そのうちの一つは、神の愛と神の救いが、「可愛^{かあい}が^がって^がくださる」こととして繰り返し語られているということであり、その神の「可愛^{かあい}がり」を受けることは、人間（子ども）の側からすると「ニコニコ」「安心して」いられる、幸せな状態であるとされている。

最後の特徴として、このような愛の神の救いに与るには、「日曜学校で稽古し続けること」、つまり、日曜学校教育を勤勉、誠実に受け、その教えにそって努力、勉強することが何よりも重要であるという考えが非常に強く表されている。『神の話』の前に「訓蒙」が付されていることからわかるように、子どもたちへの訓育、道徳的な教えや諭しによって、「神（の話）」は受け渡されていき、「神」とその救いは、たゆまぬ日曜学校教育を受け、その道に励むことによって、子どもたちのものとなるという考え方が色濃く強調されている。

先生は此の様な^か眞^み神^か様^みの子になりまして可愛^{かあい}が^がて^が貰^あいますから、天^{あま}変^へ地^ち異^いが^がありまして一寸も恐怖^{おそろし}い事はありません。安心して気^き楽^らに思^{おも}って居^ゐります。諸^{もろ}君^{ぎみ}も早く日曜学校で眞^ま神^か様^みの事を稽^か古^こなさいまして、眞^ま神^か様^みを知^しって^{このうえもないえらい}全^か知^み全^か能^み、眞^ま神^か様^みから可愛^{かあい}が^がられる子達となりなさいまして、天^{あま}変^へ地^ち異^いが^がありまして、少しも恐^{おそ}い事は無^なといふ強^{つよ}剛^{こた}子^ち達^ちとな^なって下^{くだ}さいませ。(第2回)

日曜学校へきてほんとの神様の教えを聞き、神様に可愛^{かあい}が^がられる子達となると、怖^{おそ}い事はすこしありません。…神様が何時も、何処でも皆さんと一所においでですから大丈夫であります。(第3回)

のように、「先生（三戸）」自身の例をも出して、子どもたちの持つ^{おそろし}恐^{おそ}れ（恐怖^{おそろし}い事、恐^{おそ}い事）が、日曜学校によって、神に可愛^{かあい}が^がられる子になることで無くなり、「安心」「気^き楽^ら」「強^{つよ}剛^{こた}さ」や「大丈夫」へと進んで行くと表現されている。

三戸において興味深いのは、子どもたちの持つ恐

れの内容が、単に天変地異といった物理的なものにとどまらず、精神的な恐れにも及んでいることである。第4回においてそれは端的に現れ、「真の神様は私共の致すことや心の中で思うことも直ぐお知りです。…どのように隠しましても隠すことはできません。アア恐いことではありませんか」と述べられ、「それで私共は、何時も日曜学校へ来て、神さまの教えを聞き善い心を以って賢い行いを致しまして、その神様から善い事をするのを知られて可愛がられるようにいたしたいです」と結んでいる。物理的にも精神的にも、恐れと不安に駆られる子どもたちにとって、日曜学校につながって善行に励むことで、わたしたちを可愛がってくださる神様に守っていただけるという救いは、三戸において特に重要で価値の高い、子どもたちへの使信、福音だったのだと思われる。

こうして、本書の最終第10回は、神についての話の真骨頂を告げる。少し長いが、全巻のメッセージが「順坊のおばあさま」が語った、二人の坊への言葉に集約されているので、最後に挙げておく。

そこへ順さんのおばあさまがやってきて、「可愛い子らよ」と二人を両方の手でしっかりと抱きしめて「神様の御愛が分かったか、坊らは善いことを知りました。神様は坊らの親様が坊らを可愛がりなさるように、人間を可愛がってくださいますして、人間を神様の子とおっしゃって、万物を造ってくださったのであります。ちょうど坊らの親様が坊らが可愛いから、必要の物はこっちから云わないうちに拵えてくださるようなものであります。神様はいつも心配して、善いものになるように教えてくださいます。坊らは日曜学校の先生からよく習ってくださいよ。また、このお父様の神様は、全知全能でいついかなる時もおいでになり、どんな事も知っておられるので、神さまの可愛い子がこれをしてくださいとお願ひ申す事は何時でもお気にいってくださいます。何と有難い幸せの事ではありませんか。日曜学校で神様の教えをよく聞く稽古をして、何時でもそのようにしますと、お父

様なる神様のいちばん可愛い子どもとなれます。」

神について子どもたちに語ってきた十篇は、見事と思われるぐらいイエス・キリストによる十字架の贖罪について直接的にふれないまま¹³⁾、親なる神の愛について語り切る。そして、最後に、その神の可愛い子どもたちにあなた方こそがなるのだと宣言し、「神の子」としての人生一日曜学校とつながった人生でもある—へと子どもたちを招いて書を閉じているのである。

Ⅱ. 三戸吉太郎の日曜学校教育論

ここまでの『神の話』の考察を中心として、わずかに残された三戸の他の論考、その後の三戸への評価を加え、三戸の日曜学校教育とはどのようなものであったのかを、以下に三つの特徴から分析していく。

第一は、三戸の日曜学校教育論を支える、子ども観、子ども理解から導き出される「継承者教育としての日曜学校教育」である。

三戸は何よりもまず、子どもたちを心から可愛がっていた。子どもたち、それは彼にとって何よりも可愛いらしい存在であったことは明らかで、『神の話』の一節でも声に出して読むならば、子どもたちに向けられた慈愛に満ちた三戸の笑顔が浮かぶようである。しかし、可愛い子どもたちへの愛にあふれたまなざしを持ちながらも、三戸は子どもたちの現実を深くとらえている。彼の観察と理解の深さは、『神の話』に展開される子ども世界の描写の素晴らしさや、子どもに語りかける言葉づかいがそれを証明している。

その『神の話』から見られる子どもは、人間としての怖れを持ち、死へと向きあわせられ、神の前では非力で無力な弱い存在である。そこには三戸の、ロマンティズムを排除した現実的で実存的な子ども理解が見受けられるのである。

しかしながら、教育論的に考察するとき、子どもを見る三戸の立場は常に「先生」（教師）としてのものであることも、『神の話』が全巻を通して語っていることとなる。教えるべき教師である彼にとつ

13) 『神の話』では、「イエス」が明記されているのは全編を通じて2回のみで、三戸による序の冒頭のマルコ10:13-16の引用中だけとなっている。あえて、自らの文章中にはイエスの名前を書かず、『神の話』と題して「神の」話に終始しているが、その冒頭にイエスと子どもたちの記事を配したことで「イエス・キリストの父なる神」についての話であることを暗示していることが興味深い。

て、子どもは、教えられるべき存在、つまり、学ぶべき、生徒としての存在なのである。子どもたちへの愛は、教師としてのそれであり、救いをもたらされるべき弱い実存は、真の教えを教師によって説かれて救われるべき実存として理解することができる。

『神の話』から23年後に、三戸は「日本メソヂスト日曜学校局長」の肩書で、「今日の児童が将来の父母となり、市民となり、此世界の後継者となるのである。故に児童は世界の起点と言っても過言ではあるまい。」と述べている¹⁴⁾。ここには将来を見据えた子ども理解が明確に示され、この将来的理由によって子どもたちを教育する責任があるとの展開がある。また、わずかに残された伝聞、研究に『『今日の日曜学校は明日の教会』』というのが三戸吉太郎の繰り返し言った言葉と伝えられている¹⁵⁾とあり、それが三戸の教育観の中心にあった思想であったことが裏付けられる。

子どもは、日曜学校において、正統的な教義と神理解を正しく学び、「神の子」とされて、それらを継承していく。こうして日曜学校は、真の神の子を訓育するところの後継者教育（継承者教育）の場として、三戸に理解されているのである。

第二に、三戸が提唱したのは、「教育的伝道としての日曜学校教育」であった。『神の話』において三戸は、異教社会である日本で、他宗教や多神論の渦巻く中で、真の神を知らせることの大切さを強調している。そのような社会に生きる子どもたちに、それらを離れて、「日曜学校へお出でなさい」と一貫して説くのである。日曜学校はこうして、日本社会での伝道を担う業として位置付けられる。

前出の「大成運動と日曜学校事業」において三戸は、メソヂスト教会の教祖である J. ウェスレーが、「宣教的傳道の他に更に教育的傳道を採り此二大傳道に等しく奮闘努力」した結果、今日の大メソヂスト教会が組織されたとの理解を示して、教育的伝道の正統性をウェスレーに求めている。また、その（ウェスレーの）教育的伝道法とは、「児童及青年に對して徹底的宗教々育を施し、健實なる基督教者を

養成する今日の所謂日曜學校運動である」と定義する。日曜学校は、子どもたちに熱心に聖書教話を講じることで教化し、キリスト者、キリスト教信仰の後継者を育てるという教育的機能を持って、伝道するということになる。

三戸は教育的伝道法である日曜学校運動を、当時メソヂスト教会が行っていた「大成運動」の一つの方法論として、「我が国教化改善」を目指していくことを強く勧める。そして掲げられた目標は、回心者信者獲得の具体的数値¹⁶⁾となっていくのである。

最後に、三戸の日曜学校教育は、「メソヂストの道徳的、教育的特徴」を備えたものとして理解される。メソヂスト教会の特徴は今述べたように、ひとつには「伝道」熱心であることが挙げられるが、教派名の由来ともなった method 重視の傾向も、非常に強い特色である。つまり、礼拝や祈り、教会の集会や教えに対する勤勉や精勤が強く求められ、監督制のヒエラルキーと権威をもつ教会によって指導された生き方、道徳的で敬虔な態度が要求されると言えるだろう。

『神の話』においても、子どもたちは、知的学習と鍛練（稽古）し続けることを再三にわたって要請されている。子どもたちは、教授—学習（先生—生徒）関係の中で、先生から「たゆまず」知的に勉強することが求められている。その結果として、頭で理解する学校教育型（教室型）教育によって、学び、分かることが、賢いこととして称賛されているのである。第9回の例話に出てきた「悟さん」は、賢い、分かる子どもたれ！という願いが込められた名前であり、第10回の「順坊」は、日曜学校に精勤して、その教えに順奉し、神についての教義を頑固者の「磐坊」に語り聞かせる従順で模範的優等生を表しているのである。

このことは、三戸の日曜学校実践に見られる、精勤を進めるカード貼『天使之聲』や、自身が創作した「日曜学校生徒の歌」¹⁷⁾の歌詞、「日曜学校の約束は、朝夕神に祈をし、父と母とを敬いて、煙草を吸わず酒飲まず」、「…また折々の、集まりに出てキリストの、お教えを聞き行なうが、何より大事の務め

14) 三戸吉太郎「大成運動と日曜学校事業」『教界時報』1503号、1920年6月18日発行、p.6。

15) 松川成夫「『日曜学校教育史上の人物』を学ぶ—三戸吉太郎をめぐる—」（『教育センターだより』第17号、1983年12月1日発行）

16) 三戸吉太郎、前掲文書「大成運動と日曜学校事業」には、「日本メソヂスト教會日曜學校發展の標榜（來る総會迄）」としてその4年で達成すべき数字が「日曜學校數 壹千校以上、教職員數 參千人以上、生徒總數 拾萬人以上」として挙げられている。

17) 『日本基督教団宇和島中町教会百年史』日本基督教団宇和島中町教会、1997年、p.101。

なり」に明らかに見られるものである。さらに、三戸が晩年を費やした「ハミル日曜学校教師養成所」¹⁸⁾の構想も、知的理解と訓練を伴い、相当な課程を課して日曜学校教師の養成が成るという認識を裏付けるものとなっている。

三戸に見られるこのメソヂストの道徳的、教育的特徴は、一言で言うならば discipline ^{ディシプリン} として言い表わされるのではないかと思われる。三戸は、日曜学校教育に discipline：訓練、しつけ、規律などの要素を色濃く持ちこんだ。そこで日曜学校は discipline：鍛練、練習、稽古、修養などの場として理解されることとなったのである。discipline 自体は、もちろんイエスの弟子たち ^{ディサイプル} (disciple) につながる言葉として、教育を考える上で重要な概念であるが、権威や正統性への従順が、その徳として浮かび上がる言葉でもある。それらの要素は、三戸の日曜学校教育論の際だった特長となり、その後の日曜学校教育に強い影響を与えるものとなっていくのである。

おわりに

以上述べてきたように、『神の話』から垣間見られる三戸の児童観、教育観には、色濃く当時の日本メソヂスト教会の日曜学校教育論が反映されている。それは特に、同時代の田村直臣の宗教教育論と比較するとき、子どもたちをありのままに受け容れ、神の子として養育するといった、自由主義的な神学と子ども理解に基く教育観や、宗教「養育論」な発想とは対極にある、明らかに「訓育的」な教育観ではないかと思われる。自由主義的な立場からは、三戸のそれは、批判すべき点や課題を多く含んでいる。

しかしながら、三戸が展開する日曜学校教育は、「神の子」として正しく善く生きようとする道や模範を、日曜学校へと通って稽古するという具体的な在り方として提示していて、子どもたちにとって非常に分かりやすく、シンプルで惹きつけられる内容を持っている。また、努力する目標が明確であることもあって、教える側にも理解しやすく、教えやす

いため、今日の信仰継承教育や児童・青年伝道の推進という教育的伝道の観点からも高く評価され、学ぶべき点が多いのではないかと思われる。

実際に、今日日本で行われているキリスト教教育・保育を考えると、幼児教育・保育、キリスト教主義の学校教育、教会教育のすべての現場において具体的にとられている方法論と教えられている内容は、三戸が『神の話』において展開した教育方法や内容を多くの点で踏襲するものとなっているのではないだろうか。礼拝の形式や回数、静粛が求められる状況、勤勉さやしつけの問題、賢い子、「よい子教育」の是非、道徳教育的要素や社会、国家、親の要望をどこまで目標設定と教育に反映させるのか、といった、具体的な今日的課題を批判的に検証する上で、三戸の教育論は優れたひとつの指軸となるのだと思われる。

さらに、彼が「神について」子どもたちに語る中で取り上げている主題と内容—自然や命から造り主である神について学び、人間の有限性と超越的存在を吟味し、「^{スピリチュアリテイ}霊魂」や「死」について正面から言及する—は、今日のキリスト教教育・保育にとって、今ここでのわたしたちの問題そのものであると思われる。

宇和島教会での弟子尾崎和夫は、三戸がしばしば、「『三戸は婦人科、小児科専門だ』なんての冷笑を浴せられた」と語っていた事を記録している¹⁹⁾。日曜学校教育などというものが、嘲笑的、軽蔑的に扱われていた時代において、三戸は「児童宗教々育事業を自己の天職と自覚」し、30年以上を一心に「^{しし}孜々として」「我が国日曜学校の指導者として東奔西走、寝食を忘れて斯業の充実発展に尽瘁」したのである²⁰⁾。

日曜学校教育、ただそのこと一つに賭けて、全生涯を送った三戸吉太郎の声を、当時は「孜々として」聞かれなかった声を、現代のキリスト教教育・保育に携わるわたしたちは聴きとり、自らが子どもたちに今語る「神の話」のありようを、深く吟味しなくてはならないと思わされるのである。

18) ハミル館事業については「神戸に新設せらるゝ日曜学校教師養成所」と題する報告文書に詳しい。『日曜学校』第50号、日本日曜学校協会発行、1918年9月15日、p.35。

19) 尾崎和夫「人としての三戸吉太郎先生」『神学評論』記念号(1934年10月)

20) 日本メソヂスト教会の1926(大15)年(三戸の死の翌年)「第19回西部年会記録」に書かれた三戸吉太郎の略歴。この「孜々として」は日曜学校教育に取り組む三戸を、最もよく表す言葉ではなかったかと思われる。